

東京展コミックアートの歴史

コミックアートは、今の日本において文化の主流を成すまでになったと言って良いかもしれません。若い学生で画家志望とは、すなわち漫画家やアニメーターやコミックイラストレーターになることを指します。街中にコミックアートのものが氾濫して、それは老若男女みんなが見慣れた光景になって来ています。そうした中でも単なる商業美術に留まらない、東京展ならではの『創作オリジナルアート』を集めて展開して来ました。せっかく美術館で展示するのですから、それなりにクオリティーの高いものでないと意味を成しません。イラストレーター本人が自ら主体的に出したいものを出していただく。そしてここに参加するには一定の水準を満たしてないと審査を通りません。

東京展コミックアートの前身は完全招待の企画展＝『インターネットと現代の絵師たち展』です。これは田所が当時事務局長であった青柳芳夫氏の自宅に押しかけて説得したのが始まり。腕の立つ11名が参加してくれて大変好評を博しました。私はそれ一回こっきりのつもりでしたが、委員の方々の意向が「二回目もやってほしい」ということだったので、次年度は14名に拡充して展覧しました。そこで勢いをつけてコミックアート部門新設となったわけです。当初は出品料を払う参加者が集まるかと疑問視されましたが、藤ちょこさんの関係者でありポータルグラフィックス社の柳澤和起さんに相談して、「ピクシブだけでなく、専門学校卒展にスカウトに行ったらどうですか？」とアドバイスを受け、それを愚直に10年繰り返して来ました。もちろんインターネット上のサイトにも目を光らせて、個性的な実力者の発見に努めています。年に数名、自薦で申し込まれる方もいますが、半分以上はお断りしています。私の判断（審査）基準は以下の3つです。

- 1 誰が見ても上手いと思うイラスト
- 2 上手い下手を抜きにしてオリジナルや個性が認められる
- 3 発表歴がそれなりにある

です。コミックアートに抽象画はほとんどありません。具象画であるコミックイラストの文脈に基づいた上手下手は、一目瞭然です。しかしそこにばかり視線を注いでも、表現の幅は大きくなりません。やはりその人らしさや、独自性も判断基準としては大きいです。そしてキャリアも大事。30代の方がずっと継続してコミックアートを描いていたら、それは十分評価に値します。昔描いていて、年齢を重ねてから再開した人は駄目です。もちろん1と2のどちらかであれば問題ないのですが・・・です。ですからけっこう判断は迷いません。

初回の企画からずっと出展してくださっている藤ちょこさんには感謝の気持ちでいっぱいです。天才的な才能を持ち、時代の寵児でもあります。昨年（2023年）にはWEB東京展コミック賞の審査をつとめてくださいました。二回目の企画展からご縁をいただいているK,Kanehiraさんは、一昨年の審査をお願いしました。彼もアニメにおける背景画の第一人者です。



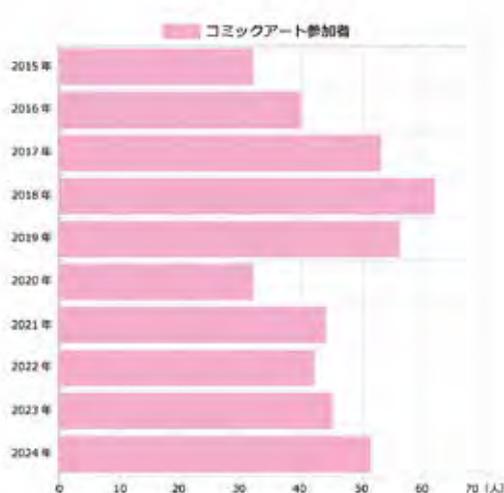
第一回『インターネットを現代の絵師たち』企画のチラシ

今年で東京展コミックアートは目出度く10周年です。2020年は新型コロナ蔓延のためWEBでの展観となりました。そこで少し人数を落としたものの、ここ数年はまた持ち直しています。東京展は東京都美術館の空間を借りて展覧会をやっているの、無尽蔵に参加者を増やすわけには行きません。点数も関係しますが、50人前後が妥当な数字かと考えていますがいかがでしょうか。入れ替わりも激しいので、毎年新規参加者を20名くらい補充しています。なかなか大変な作業ですが、新しい才能と出逢う喜びが勝ります。優れた絵は観る側の気持ちを明るく、そしてエネルギーにしてくれるのです。

最近AIが問題になっています。藤ちょこさん始め、その被害に遭っているイラストレーターも多いです。海外に発信源を持っているサイトではなかなか対処しきれません。東京展ではAIを使用している作家さんには遠慮していただく姿勢を打ち出しました。同じ作家として自力で作画している作家を守る立場でいたいと思います。もっと言うと、東京展は売れる売れないは、とりあえず関係ないので、自分の表現を徹底して突き詰めて欲しいです。AIなんて関係なし。AIに負けるな。まず己の自己表現、自分の主観を先鋭的に表出して欲しい。自由を突き抜けた先の風景を見せつけようではありませんか。それこそが東京展コミックアートのレーゾンドートル=存在理由です。



りいちゅ氏によるライブペインティング (2017年)



2013年 第39回東京展 インターネットと現代の絵師たち展 企画展 Vol.1 11名参加

● 碧風羽氏によるライブペインティング (デジタル絵画)

2014年 第40回東京展 インターネットと現代の絵師たち展 企画展 Vol.2 14名参加

● 藤ちょこ氏によるライブペインティング (デジタル絵画)

2015年 第41回東京展 コミックアート部門新設 32名参加

2016年 第42回東京展 コミックアート部門 40名参加

シンポジウム『コミックアートの展開力』

(パネラー=柳沢和起氏・藤ちょこ氏・東條弘嗣氏・オオタニヨシミ氏)

5月に銀座ワンでサロン・ド・東京展フレッシュコミックアート展

14名参加

2017年 第43回東京展 コミックアート部門 53名参加

りいちゅ氏によるライブペインティング (デジタル絵画)

2018年 第44回東京展 コミックアート部門 62名参加

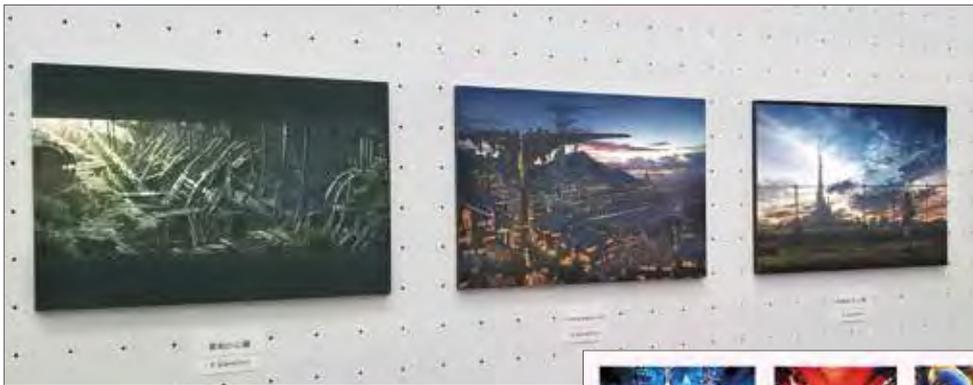
1月にギャラリー華沙里で東京展出品者10人による『新春・イラスト展』

11月、12月にG.SHIMIZUで『Merry Christmas コミックアート東京展』

2019年 第45回東京展 コミックアート部門 56名参加

6月～9月 南牧村美術民俗資料館で『18人の若き絵師たちの饗宴』

2020年 第46回東京展 WEBで公開 コミックアート部門 32名参加



K, Kanehira 氏の展示風景（2018年）

2021年 第47回東京展 コミックアート部門

44名参加

『コミックアートに見る夜景考』

企画展示 13名による18作品

2022年 第48回東京展 コミックアート部門

42名参加

第一回WEBコミックアート賞

（審査員＝K, Kanehira 氏）

2023年 第49回東京展 コミックアート部門

45名参加

第二回WEBコミックアート賞（審査員＝藤ちょこ氏）

2024年 第50回東京展 コミックアート部門 51名参加予定

第三回WEBコミックアート賞（審査員＝わいっしゅ氏予定）



『新春・新イラスト展』（ギャラリー華沙里）案内状

（文責：田所一紘）



『18人の若き絵師たちの饗宴』（南牧村美術民俗資料館）ポスター 藤ちょこ氏イラスト